

知求会ニュース

2012年4月

第41号

◎ 博士前期課程、修了おめでとうございます！

2012年3月22日木曜日午後1時10分から国際学部A棟4階大会議室にて、2011年度学位記手渡し式が開催されました。

今年度の修了生は、国際社会研究専攻 笠井卓幸さん、金海山さん、胡俣さん、坂本正昭さん、徐達明さん、戴曉敏さん、張悦さん、陳懷宇さんの8名と国際文化研究専攻 王雪嬌さん、郭曉光さん、木村範子さん、金秀麗さん、高橋里衣さん、褚冠南さん、沼澤美幸さん、余卓洋さん、李妹さん、賈文瑾さんの10名、そして、国際交流研究専攻の尹曉傑さん、王菲さん、加瀬智恵子さん、高木亜紀さん、ナサンバヤル・ボロルマーさん、三成清香さん、屋代英二さんの7名で、計25名でした。

17年度より、学業優秀者に贈られる宇都宮大学奨学金(奨励賞)に、国際学研究科の1名として木村範子(国際文化研究専攻)さんが受賞されました。

◎ 博士後期課程 博士号取得、おめでとうございます！

サソチア(国際学研究専攻・2期生)さんと岡本義輝(国際学研究専攻・1期生)さんが、3月22日(木)に戸川さん、方さんに続いて第3号・第4号の博士号学位を授与されました。

◎ 博士後期課程、進学おめでとうございます！

陳懷宇(国際社会研究専攻・12期生)さん・木村範子(国際文化研究専攻・12期生)さん・三成清香(国際交流研究専攻・7期生)さんの3名が揃って、宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻に進学されます。

◎教職員人事異動

若山俊介教授

留学センターの若山先生が、3月31日付で一身上の都合により早期退職されました。宇都宮大学には1984(昭和59)年4月から在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。教養部10年半、国際学部7年半、留学センター10年と28年間在籍され、特に留学センターでは、留学生を囲んだパーティーを開催されました。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。

高橋 優講師

地球文化形成研究講座の高橋先生が3月31日付で任期満了につき退職されました。宇都宮大学には2009(平成21)年4月から在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。

石川美枝子さん

事務補佐員の石川さんが3月31日付で定年退職されました。後任には、山下純子さんが着任されました。

◎ 2月入試合格結果

国際社会研究専攻 一般 0名・社会人 1名・外国人 2名 計3名
国際文化研究専攻 一般 0名・社会人 0名・外国人 4名 計4名
国際交流研究専攻 一般 0名・社会人 1名・外国人 2名・
国際交流・国際貢献活動経験者 1名 計4名 合計11名

◎ 3次入試合格結果

国際交流研究専攻 一般 0名・社会人 1名・外国人 1名・
国際交流・国際貢献活動経験者 1名 計3名 合計3名

* 『HANDS next—とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ

2007年9月20日に、ニュースレター『HANDS』第1号が発行されました。2010年度より宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』がリニューアルされ、『HANDS next』として再出発することになりました。

第8号(2012年2月20日)

特集 外国につながる子どもフォーラム 2011

第1部 創作劇

創作劇を通して学生から伝えたいこと

国際学部3年 海野杉江 教育学部2年 戸井田真弓

第2部 教員・支援者にとって有効な手引き書について考える

～『教員必携 外国につながる子どもの教育 Q&A・翻訳資料』をめぐって～

司会：若林秀樹（国際学部特任准教授） / 佐藤和之（真岡市立真岡西小学校教諭）

パネリスト：加藤佳代（神奈川県立地球市民かながわプラザ・

あーすぷらざ外国人教育相談コーディネーター）

相田 孝（栃木市立南小学校教諭）

石塚倫子（栃木市立栃木中央小学校教諭）

第3部 進学ガイダンスのあり方について考える

司会：田巻松雄（国際学部教授・HANDS プロジェクト代表）

パネリスト：大関健二（真岡市立真岡西小学校校長）

田中正浩（真岡市教育委員会指導主事）

原田真理子（佐野市日本語教室指導助手・

国際学部附属多文化公共圏センター研究員）

渡邊恭子（栃木県立鹿沼東高等学校教諭）

上原秀一（教育学部准教授）

「外国につながる子どもフォーラム 2011」～アンケート結果（抜粋）

HANDS2年目のフォーラムを終えて 国際学部教授・HANDS プロジェクト代表 田巻松雄
シリーズ；たぶんか共生

外国人生徒の新たな進路選択の1つとして

国際学部 国際文化学科 4年 中島久雄

第3回グローバル教育セミナー報告

大学院国際学研究科博士後期課程・

国際学部附属多文化公共圏センター研究員 根本久美子

内地留学を終えて

平成23年度前期ポルトガル語内地留学生・

大田原市立佐久山小学校教諭 小島俊子

シリーズ；学生ボランティア派遣体験記5

学生ボランティアを受け入れて 矢板市立片岡小学校教諭 見目治美

未来を見据えた支援の必要性 国際学部国際文化学科3年 松田梨奈

コミュニケーションを大切に 国際学部国際社会学科3年 小向郁衣

事務局便り

・HANDS プロジェクトからのお知らせ

『中学教科単語帳』（日本語⇄スペイン語、別冊つき）と

『教員必携 外国につながる子どもの教育 意欲につなげる日々のアイデア』（仮称）

刊行の予告

・平成23年10月から平成24年3月までの活動

◎ 平成23年度 第2回 各学部等同窓会連絡協議会報告

2012（平成24）年3月8日（木）午後4時から、コミュニティフロア（UUプラザ2階）にて、平成23年度第2回 各学部等同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は進村武男 学長・馬場敬信 理事・渡邊直樹 理事・石田朋靖 理事・國友孝信 理事の大学側5名と事務局担当者4名、土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・柴田毅 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・清水由行工学部同窓会副会長・上澤和彦工学部同窓会副会長・和賀井睦夫 農学部同窓会会長の同窓会側6名でした。議事内容は、協議事項として、1. 第2回ホームカミングデーの開催について、2. その他、検討事項として、1. 各学部同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。

◎ 掲載記事紹介

1. 毎日新聞 朝刊 (平成 23 年 12 月 2 日発行) 25 面に、「外国人の子ども教育問題考える」と題して、「あす宇大フォーラム」の内容で HANDS プロジェクト代表・**田巻松雄**先生の記事が掲載されました。
2. 下野新聞 朝刊 (平成 23 年 12 月 8 日発行) 3 面に、「震災復興 アジアに学べ」と題して、「宇大で国際シンポ」「スマトラ、四川の事例紹介」の内容で**国際学部**の記事が掲載されました。
3. 下野新聞 朝刊 (平成 24 年 2 月 21 日発行) 3 面に、「二重生活 負担大きく 避難者に「個別対応を」」「宇大で福島・乳幼児支援報告会」と題して、「避難の障壁 「就労」 80%」の内容で宇都宮大**国際学部附属多文化公共圏センター**「福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト」の記事が掲載されました。
4. 朝日新聞 新潟版 朝刊 (平成 24 年 3 月 8 日発行) 2 面に、「連続インタビュー考 3・11」シリーズで「精神的な「分断」に悩む母親たち」と題して、「避難の決断 寄り添うことが重要」の内容で**高橋若菜**先生の記事が掲載されました。
5. まちびあ 春号 (平成 24 年 4 月 1 日発行) 2-3 頁に、「まちびあから「まちづくり」始めませんか?」と題して、「新しい仲間たちはすぐとなりにいる」「疑問は「きっかけ」のもと」「突きぬけるヒトビトを育てる」の内容でセンター長・**安藤正知**さん(国際社会研究専攻・4 期生)の文章が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. 栃木よみうり (平成 23 年 11 月 4 日発行) 1 面に、「13 日にフェアトレードまつり」で、「買って食べて海外協力」の内容で学生サークル・**カケハシーズ**が紹介されました。
2. 下野新聞 朝刊 (平成 23 年 11 月 19 日発行) 23 面に、「宇都宮 独自視点でまちづくり 学生 12 団体が提案発表」と題して、宇都宮大学**行政学研究室 B**の記事が掲載されました。
3. 読売新聞 朝刊 (平成 23 年 11 月 20 日発行) 34 面に、「新聞編集 学生が挑戦」と題して、「記事選択や見出し作り 宇都宮大」の内容で国際学部 3 年生**岩崎芽依**さんらの記事が掲載されました。

◎ 新刊紹介

1. **中島耕二**さん(国際文化研究専攻・2 期生)が、2011 年 12 月 15 日に『近代日本の外交と宣教師』を吉川弘文館より刊行されました。
2. **矢島亮一**さん(国際交流研究専攻・1 期生)が、2012 年 3 月 22 日に『国境をこえた地域づくり：グローバルな絆が生まれた瞬間』(第 4 章を分担)を新評論より刊行されました。
3. **友松篤信**先生が編者として、2012 年 3 月 20 日に『グローバルキャリア教育 グローバル人材の育成』をナカニシヤ出版より刊行されました。
4. **小原一真**さん(国際学部卒業生・10 期生)が、2012 年 3 月 10 日に写真集『Reset Beyond

Fukushima』を Lars Müller Publishers (スイス) より刊行されました。詳細はウェブサイト：<http://resetbeyondfukushima.com> または、国際学部同窓会HP (<http://www.afis.jp>)にある「コミュニティ広場」から「知求会ニュース第 41 号 画像編」をご覧ください。

研究室訪問 33 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 33 回には国際社会交流研究講座所属の**米川正子**先生にお願いしました。

「グローバル人材と国際キャリア開発プログラム」

米川 正子

近年、大学機関においてグローバル人材育成の必要性が問われて久しい。私が 2009 年度以降関わってきた「国際キャリア開発プログラム」においても、そのような人材育成に力を入れてきた。個人によって「グローバル人材」の定義は違うが、一般的に、語学力、コミュニケーション能力やリーダーシップ、そして専門性がある人と言われている。しかしそれだけで十分だろうか。また語学力やコミュニケーション能力に関して、我々はもっと広い角度から見る必要があるのではないだろうか。コミュニケーション能力と、他人の痛みの理解の 2 点から、私が考えるグローバル人材について共有したい。

多様なコミュニケーション能力

まずコミュニケーション能力と一口で言っても、いろんな意味が含まれている。文部科学省によると、コミュニケーション能力は、「異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するため」のものである。しかし当然のごとく同じ言語の中にも、国・地域によってさまざまな発音やイントネーションが存在する。日本では、いわゆる「ネイティブ・スピーカー」(注：この定義はあいまいで、英語の場合はアメリカ人、カナダ人、イギリス人やオーストラリア人等を指すが、旧イギリス植民地の国々であるインド人やケニア人等は含まれない)による語学にしか慣れていないため、非「ネイティブ・スピーカー」が話す語学が聞きとれない危険性がでてくる。

昨年開催された「国際実務英語 II」ではフランス語圏の国である西アフリカのベニンの講師を招聘したが、学生によると、フランス語なまりの英語を理解するのに苦労したとのことだった。また今年 2 月にルワンダのフィールド・スタディーに学生 8 人を引率した際も、学生はルワンダ人や他の外国人が話す英語が最初のうちは聞き取れなかった。グローバル化とは異なる言語だけでなく、日本人なまりの英語を含む「多様な英語」にも慣れることであるため、普段からいろんな外国人と接する必要がある。

またコミュニケーション能力とは外国語学取得だと考えている人がいるようだが、語学はあくまでも人とのコミュニケーションがとれる「ツール」であって、語学取得が目的にな

ってはいけない。「外国語をペラペラに話せる」ことでなく、「相手を理解し、自分のハートで持って話す」ことが重要だからである。だからこそ、「国際実務英語 I・II」では、「英語を」ではなく、「英語で」専門分野を学ぶことにこだわった。普段の授業でも、英語で学ぶ機会が増えることを願っている。

最後に、このコミュニケーション力には交渉力やサバイバル力も含まれなくてはならないと、ルワンダへのフィールドワークの際に痛感した。予期しない問題への対処方法や交渉に学生が慣れていないのだ。日本では「和を」重んじるあまり、日本人は必要でない限り交渉や激論を避ける傾向が強い。しかし外国によっては、よいとされる日本人の礼儀正しさや従順が悪用されることがあり、金で解決できる事態ならまだよいが、場合によっては身の危険にかかわることもある。そのため、Yes, No は当然だが、自分の意見を相手に納得してもらうために、論理的にかつ批判的に伝えることが重要だ。「本当にこれでいいのだろうか」「なぜこうなのか」と常に自分や周りに問うことで思考力が高まり、いざという時にも自分の安全を守ることができるだろう。

他人の痛みの理解

グローバル人材の要因として新たに付け加えたい点が、「他人の痛みを理解する」ことである。原発・放射能問題、沖縄の米軍基地問題、世界の紛争、貧困、環境破壊、安全保障問題や、日本政府や国際社会で働くエリート層を見ていると、他者、特に社会的、政治的に弱い立場の人への理解がどれだけ欠乏しているかがよくわかる。自分や自分の家族とは直接無関係なことを他人事ではなく、自分の問題として受け止め問題解決することは残念ながらほとんどない。

私は 2008 年まで 10 年間以上にわたって、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）職員として主にアフリカの現場で働き、紛争や政治の犠牲者である難民や国内避難民の支援や保護に携わった経験がある。当然「外部者」として関わってきたので、現地の者（内部者）の深い痛みを十分に理解していなく、また一生それができないかもしれない。それでも理解しようと努力はしたと自負している。その経験があるからこそ、文献だけでは把握できなかった状況が理解でき、現在魂を持って、アフリカの紛争や平和構築に関する啓蒙や研究活動に力を入れることができる。当然のごとく、長年の現場経験があるから現状を把握しているとは言い難く、またさまざまな事情で現場に行けない人もいるだろう。そのため現場行きが必修とは言えないが、機会があれば学生は「国際キャリア実習 I・II」（国内・海外インターンシップ）を受講して、現場で弱い立場の人ととことん話をしてもらいたい。

2 年半にわたって「国際キャリア開発プログラム」に関わってきたことを誇りに思うと共に、お世話になった皆様に心からお礼を申し上げたい。そして今後の宇都宮大学のグローバル

人材育成に引き続き応援をしたい。

(2012年3月20日原稿受理)

博士録14 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第14回目には後藤恵美さんをお願いしました。

「社会人学生のススメ」

中村学園大学流通科学部 専任講師

後藤 恵美

<大学院進学までの経緯>

宇都宮大学国際学部に入學して一番驚いたこと、それは社会人学生の多さである。仕事しながら勉強？今さら勉強？なぜ？？？そんな思いで、一番前の席に陣取り、熱心に講義に耳を傾ける社会人学生の姿をずっと後ろの方から見つめていた。

大学を卒業し、思い描いたような進路に進めず何となく働いていた会社員時代、ふとしたことから「マーケティング」という言葉を知り、興味を持った。とりあえず朝晩の通勤時間を利用して「通勤大学シリーズ」(総合法令出版)の本でマーケティングをかじってみた。面白い！使えそう！そして、本だけでは飽き足らず、大学院進学を考えるようになった。私が大学院？笑える！でもその思いは日増しに強くなり、勢いで大学院を受験してしまった。

宇大を卒業した2年後、名古屋市立大学大学院経済学研究科修士課程に入學、また学生になってしまった。名古屋市立大学を選んだのは、社会人大学院生を日本で最初に受け入れた歴史があり、仕事と学業の両立のバックアップがしっかりしていたことと、指導教官の岡田廣司教授も同大学院の修了生であり、仕事をしながら研究に取り組んだ大先輩として指導を仰ぎたいと考えたからである。

<修士課程、そして博士後期課程へ>

修士課程では経済学・経営学を学び、その中から研究テーマとして「高齢者向けの商品開発」を選択した。商品開発は企業のマーケティング戦略における重要な一分野である。高齢者向けとしたのは、その頃ちょうど祖母の老化がひどくなり、生活の中の様々な場面で「この商品は老人には使いにくい。」「もっとこうだったらいいのに・・・」と感じる事が多かったためである。慣れない経済学・経営学の勉強に悪戦苦闘しながらも楽しかった修士課程の2年間はあっという間に過ぎ、無事修了。さらに、修士課程在学中に転職し商品企画部に配属され、新商品の企画立案から市場投入までに携わる、やりがいのある仕事ができるようになった。

修士課程修了後は、これまで我慢してきた思いを発散し、人生をエンジョイする予定だった。しかし修了間際になり、もっと研究を極めたい、学んだ事を社会で活かしたい、高

年齢向け商品開発（このテーマに取り組む研究者は極めて少ない）は“私に与えられたテーマ”なのではないか・・・と思うようになった。そんな訳で、修士論文を提出した足で博士後期課程の願書を取りに行ってしまったのである。

博士後期課程では、修士課程でお世話になった岡田教授の定年退職を受け、角田隆太郎教授に指導を仰ぐことになった。しかし角田先生のご専門は経営学（組織論）であり、商品開発やマーケティングは専門外である。そんな訳で博士後期課程では、組織論（組織学習）という視点から企業の商品開発やマーケティング戦略についてアプローチすることになってしまった。角田先生は常に笑顔で親しみやすく、面倒見も抜群に良い素晴らしい指導教官であった。しかし、指導は非常に厳しく、苦勞して書き上げた論文に対してたった一行のコメントでやり直しを命じられる事も多々あった。「やっぱり専門の違う先生に指導を仰ぐことにしたのが間違いだったのか・・・」と何度も思ったが、先生の熱心なご指導のもと何とか博士論文を仕上げる事ができた。「専門が違う」と何度も思い悩んだが、振り返ってみると、実はアプローチの方法が違うだけで目指すところは変わっておらず、新しい視点や理論を学ぶことができたことは大きな収穫となった。

<博士論文要旨>

タイトル：「コミュニティを活用した消費者のパラダイム転換モデル」

要旨：

本研究の目的は、成熟市場の停滞状態を打破するための一つの実践的な対応策として、「消費者のパラダイム転換の実践モデル」を構築し、企業のマーケティング戦略における実現可能性を示すことである。

本研究では“過去の購買経験が現在の購買意思決定を左右し、必ずしも最適な購買意思決定を行っているわけではない消費者”の状態を、組織研究分野における“学習ができない状態に陥っている組織”と同等に考え、企業におけるパラダイム転換モデルを消費者のそれに応用することにチャレンジしている。そして、企業におけるパラダイム転換と消費者におけるそれとの違いを補完すべく、企業がコミュニティを立ち上げ、消費者との相互コミュニケーションを行う事によって消費者を説得するモデルを構築した。

<社会に貢献できる研究を目指して>

「実践なき理論は空虚である、理論なき実践は無謀である。」毎年手帳を替える度に必ず書き写す言葉である。大学院時代は研究室にもプリントアウトを貼って常に意識をしていた。社会人になって仕事を始めてマーケティングに出会った。何を作ってどう売れば売上ににつながるのか・・・会社では日々突きつけられる課題である。その答えを求めて研究に打ち込んだ。研究を通じて知り得た様々な事例や理論を会社での実務に活かしてみた。上手くいかない場合は別の視点を求めて再び本を開いた。その繰り返しで 5 年間はあっという間に過ぎて行った。気がつくとも私も授業中一番前に座っていた。

私は今、福岡市にある私立大学でマーケティングの教員をしている。高齢者向けの商品開発というテーマからさらに広がって、地域活性化のための商品開発・マーケティングについて調査・研究を行っている。地元企業や自治体の方々ともアクションを起こしつつある。ここでの経験を活かし、いつか商品開発やマーケティングを用いた途上国支援に携わることが私の夢である。

(国際学部 国際社会学科 第3期卒業生)

(2012年2月27日原稿受理)

知究人 20 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第41号の第20回目は、英国のブラッドフォード大学平和学部紛争解決修士課程に進学された高際研究室 OB の菅野直和さんをお願いしました。

「知の探究：イギリス→スリランカ→イギリス」

菅野 直和

私は2006年に宇都宮大学国際社会学科を卒業後、英国のブラッドフォード大学平和学部紛争解決修士課程に進学しました。大学院卒業後は2年間ほどスリランカの紛争解決系のNGOで調査員として働き、現在はそのNGOでの活動をヒントに得て、キングズカレッジロンドン戦争学部博士課程で研究をしています。国際学部から卒業後すぐに海外の大学院に進学するケースは珍しいようで、情報収集、入学手続き、英語の試験等すべて一から自分で行いました。大学院進学情報は、ブリティッシュカウンシル等の英国留学サポート機関などから得ていました。高際先生や、柏瀬先生のサポートもあり、無事に第一志望のブラッドフォード大学に合格できました。宇都宮大学では北アイルランド紛争についての卒論を書いたので、世界最大の平和研究機関といわれるブラッドフォード大学でぜひとも勉強したいと思っていました。宇大卒業(3月)後から大学院入学(9月)までの期間は、日本紛争予防センターというNGOでインターンをさせていただき、非常によい経験になりました。

1年間で修士号を取得できるイギリスの大学院は、日々論文との格闘でした。2学期制で、一つの学期に4つの科目があり、学期末にそれぞれの科目についての小論文を提出しなくてはなりません。紛争解決コースには、スタディ・トリップという授業があり、希望者はスリランカ、あるいはシエラレオネのどちらかに現地に行き実際に学んでくることができました。私は、スリランカのスタディ・トリップに参加し、大学院卒業後、その時に訪れたスリランカの紛争解決NGOに就職することになりました。結局、2年間スリランカのNGOで調査員として働き、そこで感じた「理論と現実との隔たり」の中に、現在キングズカレッジロンドン博士課程で研究している題材を見つけだすことができました。私の専門は紛争の早期警報・介入といわれる分野です。批判理論という哲学に基づき、

従来の研究、実践の仕方を批判し、再構築を試みているところです。博士課程では、新しい知の創造が求められます。独自の理論を数百ページにわたる論文で証明し、最終的にはそれを2人の学者に対して「DEFEND」しなくてはなりません。それを乗り越えると晴れて博士とすることができます。日々、ドイツ人の指導教官の元、鍛えられています。

(国際学部 国際社会学科 2006年3月卒業生)

(2012年3月8日原稿受理)

海外だより 12 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外在住者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。今回は、友松研究室OBの平田勝博さんをお願いしました。

「水深 2.5m の脅威」

平田 勝博

タイに住んで6年目となる。

空港占拠やバンコク中心部の占拠及び放火のようなデモの被害も運よく逃れた。

今までよく無事に過ごせたと思っていた矢先に、洪水はゆっくりと確実にやってきた。

私が勤務しているロジャナ工業団地（以下ロジャナ）はバンコクから北へ約80キロのアユタヤ県にある。車で高速を飛ばせば1時間強で着く比較的便利な場所である。このロジャナに洪水がやって来るとは10月6日までは誰も信じていなかった。

10月5日に同じアユタヤ県にあるロジャナから更に北の工業団地が冠水した。それでもロジャナにいる私達は通常通り勤務をしていた。ロジャナまでは水が来ないと誰もが思っていたからである。その考えが一変したのは10月7日、ロジャナの近くまで水が来ているとの情報があった。そこからは迅速に対応した。作業者を帰宅させて、1階にある電子機器を2階上げた。作業者の安全を優先した為に電子機器を上げる役目はもっぱら管理職の日本人が担当した。かなりの肉体労働である。このような作業をしている最中に、ロジャナから退避勧告が発令され、やむなく退去。しかし次の日も工業団地員の目を盗んで工場に行き、土嚢積む作業と電子機器を2階上げる作業を継続。更に金網に鉄板を溶接させる作業を業者に実施してもらった。ここまで対策すると築城した気分となり、洪水でも何でも来いという気持ちになっていた。そう、見た目には完璧であった。

その完璧の防壁が素人考えであり、洪水や自然を甘くみていたと考えを改める時間はそう必要なかった。10月9日にロジャナの運河より堤防の決壊が始まり、その水が工場前の用水路に流れ込み、数十分の後に用水路から工場に流れ込んだ。高さ2.2mまでの水に耐えうる防壁を作ったと思いこんでいたが、地下・地面から冠水が始まってしまった。しかも恐ろしい速さでの冠水である。この時はロジャナからの退避命令よりも早く非難し難を逃れた。

それからはニュースでロジャナの状況を確認する毎日が続き、1ヵ月半後の11月24日に膝下まで水位が低下したので、工場に入場した。入場した際にはまだ魚や貝が工場内を泳いでいる竜宮城の状況であり、電気のない真っ暗の工場を懐中電灯と採光を頼りに進み、洪水の脅威を確認した。ゆっくりと着実に水位を増した洪水のつめ跡は、しっかりと壁に残っておりその高さは2.5mにも及んだ。更に浮力により30トンの水を溜める重さ数百キロのタンクが浮き、破壊されていた。また別の機器も浮力により窓を破壊していた。水に浸水していない部分にもカビが生え、10年物のドブ川のような悪臭を放っていた。このような状況で工場の再生は本当に可能なのか、その当時は疑心暗鬼であった。

それでも前に進むしか道はなかった。11月28日に水位が完全に低下したので、清掃活動を開始。総勢40名で3日間かけて使えなくなった棚、机、椅子、機械等を全て外に出し、大量の水と洗剤で清掃を始めた。更に業者に依頼し100名体制で2日間かけて清掃もした。この清掃活動は12月中旬まで続き、その後の一部の電気の復旧と共に2階の浸水していないオフィスに戻り、ライン稼働の為の復旧活動を開始した。やる事は山のようにあった。ほとんどは業者任せだが、油断していると来る物が来なかったり、人が集まらなかったりと作業の遅延が多発する。その為全ての業者に毎日確認を取り、作業の状況確認と円滑に進めてもらうように業者間の調整をしていた。年が明けてもこの復旧作業は続き、最終的に2月22日に4ヵ月半振りに工場を再開し量産を開始できたのである。今回の洪水はこれからの私の人生の中でもベスト3に入る出来事だろうと思う。ある意味良い経験をさせてもらった、タイ政府に感謝する。

(国際学部 国際社会学科 第3期卒業生)

(2012年3月6日原稿受理)

海外留学今昔 05 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。今回は、ロシアに留学経験のある学部生・**檜岡由希子**さんをお願いしました。

「ロシア留学から得たもの」

檜岡 由希子

私は大学2年生の9月から3年生の7月まで、交換留学を利用し、ロシア・イルクーツク言語大学に留学しました。これが、私の人生初の海外留学、一人暮らしでした。イルクーツクはシベリアに位置し、現代の日本と比べると多くの部分で発展が遅れている町でした。道は綺麗に舗装されているわけではなく、バスや車もぼろぼろでした。市場ではおばちゃんと交渉して買い物をする生活、話せなくても生活できる日本とはかけ離れたものがありました。そんな最低限のものしかないイルクーツクは、ロシア語がほとんど話せない

私にとって困難な街でした。買い物の仕方、バスの乗り方、看板の読み方、全てがわからず不安で寮に閉じこもる生活からスタートしました。私の不安を消してくれたのは、同じ寮に住む留学生や、クラスメート、また日本にいる家族や友達でした。留学2日目から、さっそく隣の部屋の留学生が、ロシア人の誕生日会に私を連れていってくれました。また、夜は留学生パーティーにもよばれ、そこでもたくさんの友達ができました。授業でも、クラスメートがみな積極的に話しかけてくれたことで、私は日本にいたころの明るさを取り戻すことができました。

そんな私が留学で一番悩んだことはロシア語の習得でした。一から現地でロシア語を学ぶ私にとって、ロシア語を話すということはとても時間のかかるものでした。頭で考えてこれが言いたいのに、日本語だったら話せるのにと悔やみ、また、友達と遊ぶ約束をしても場所や時間を聞き間違えるなど、コミュニケーションがうまく取れず、話すことが嫌になった時期もありました。しかし、あるとき市場のおばちゃんに、あなたはどこの国の人？ロシア語がとても上手ね、発音がきれいよ、と言われました。その時私は自分のロシア語は、少しだけれど成長しているのだと実感でき、今までの努力が報われた気がしました。教科書のロシア語を勉強するだけでなく、もっと現地で話して、使えるロシア語を身につけたいと思うようになりました。それからは変なロシア語でもまず話してみよう、習った単語は使ってみようと思い、以前よりも積極的に人に話しかけるようになりました。10か月という期間で、自分が身につけられたロシア語能力はちっぽけですが、それ以上に自分自身に自信がつき、また、なんでもやってみるという挑戦する勇気の大切さもロシアで得ることができたと感じています。

この留学は、人に多く支えられえ、助けられて乗り越えることができましたものです。日本で見守ってくれる仲間、ロシアで一緒に過ごしてくれた友人や先生、関わる全ての人のおかげで今の私があります。たくさんの仲間を支え、また支えられて私たちは日々、生きていくことを忘れずにしていきたいと思いました。

(国際学部 国際文化学科 4年在学生)

(2012年3月20日原稿受理)

NEW

学生サロン 01 現役学部生（編集時）によるコーナーを設けました。

「復興活動報告」

菊地 昭裕

東日本大震災以来、不定期に故郷の宮城県気仙沼市でボランティア活動に参加しています。とは言っても特に大きな貢献をしているわけではないのですが。災害現場で役立つような特殊技能も無いし、人一人分しか持ち合わせていないけど、自分にも何か出来ることはないかと思っていたところ、地元の友人から市の災害ボランティアの話を聞き、参加

することに決めました。実家が津波の被害を免れたということもあり、ボランティア活動に専念することが出来ました。

気仙沼市の災害ボランティアセンターは三月下旬からすでに活動を始めていたのですが、私が準備を整えようやく初参加に至ったのは四月の末、ちょうどゴールデンウィークの始まる頃でした。今にして思えば、もっと早くから情報を集めて参加するべきでした。

作業の流れを簡単に説明します。ボランティアセンターで登録とボランティア保険の加入を済ませた後、スタッフのアナウンスに従い、瓦礫の撤去、汚泥の除去、家財の搬出・洗浄、援助物資の整理など、その日毎に各々が自分に出来る作業内容を選んで現場に赴きます。センターとの連絡や全体の監督を務めるリーダーを各作業班から選び、必要な資材(スコップや一輪車)を車に積み、出発します。作業終了後、センターに戻って資材を洗浄・数量をチェックした後解散、と、このような流れで進められました。作業の合間には、ボランティアの依頼を呼び掛ける案内書を配布して廻りました。被災された方々の中には、「わざわざやってもらうのは申し訳ない」と、依頼を躊躇するお宅もあるためです。

春から夏にかけては、作業現場は衛生的にかなりひどい状況でした。海底から運ばれたヘドロもその頃すでに乾いて風に舞い、裸眼で歩き回ると目が痛くなることもありました。加えて、魚や水の腐敗臭、タンクから流れ出た重油の臭いが混ざり、ひどい所では防塵マスクの消臭フィルターすら役に立たなくなる臭いでした。また、一面に散らばる瓦礫もヘドロや重油を浴びており、軽い擦り傷でも破傷風にかかる恐れがあったため、作業中にケガをした人はたとえ軽いケガでも問答無用で病院に送られました。そのため被害の激しい現場の瓦礫撤去では、極力肌を出さずにマスクとゴーグルを着用し、悪臭の中、全員汗だくになりながらの作業でした。足場も悪く、釘を踏み貫いて足をケガする人が続出し、鉄板入り安全靴の着用が毎朝呼び掛けられました。靴底に鉄板を入れれば安全かと思いきや、今度は靴の横から釘が刺さったりしました(私も危うく刺さるところでした)。とにかく、しばらくの間作業中のケガ人が後を絶ちませんでした。

八月中はずっと同じ現場にいました。衛生面は悪くありませんでしたが、日陰の全く無い場所で、絡まった漁網(長いもので百メートル)の山を延々と手作業で解体する、というもので、「終わりが見えない」「精神やられそう」とまで言われる現場でした。結局数十人掛かりでひと月かけて終わらせました。最初の数日で「他の現場に移ろうか」とも思いましたが、段々意地になってきて、何度となくリーダーを務めるうち、気が付いたらその現場専属のような立場になっていました。ヘドロが無いとはいえ瓦礫と鉤針だらけの現場、おまけに炎天下に数十人の大所帯。作業の手順やコツはどう説明すれば分かり易いか、ケガをさせないように、熱中病患者を出さないように水分・塩分補給の徹底を、等、懸念することは多々ありましたが、いざ始まってみればなんとかなりました。もちろん私の力ではなく皆さんのチームワークのおかげです。この現場で過ごしたひと月だけで、延べ千人ほどのボランティアの方々と一緒に作業したことになります。たくさんの方々に助けていただきました。

年が明け参加者もすっかり減った一月の中頃、新たに発足したボランティア団体の皆さんのお手伝いをさせていただく機会があったのですが、瓦礫処理に入った現場で、未だ重油の混ざった泥がたっぷり残っているのを見て驚きました。秋頃には現場で見ることもしなくなったため、油断していました。どうやら、家主と連絡がつかない等の諸事情で手がつけられないまま残されていた住居もあるようで、まだまだ活動ニーズはありそうです。

偉そうに書き連ねましたが、私が復興ボランティアを続けているのは、単に地元だからです。もちろん、活動を通して知り合った方々と一緒に働くのが楽しいから、ということもあります。それでも、地元のためでなければ、ここまで続けることにはならなかっただろうと思います。それに比べて、日本全国からの、また海外からのボランティアの方々は、地元でもない町のために、ひよっとしたら縁もゆかりもなかった町のために、汗水流して下さいました。毎月のように時間を作っていらして下さいます。いくら感謝しても足りません。スタッフの皆さんも、手探りの状態から発足し、依頼主とのコンタクト、資材の管理、ピーク時(と称するのは変な気がしますが)には一日百人以上の個人・団体ボランティアの受け入れと人数調整、現場までの送迎車の手配と、復興活動を力強く支えていただきました。

最後になりますが、被災地復興のために手を差し伸べて下さった皆様、ありがとうございました。今後も、復興活動を続けていきます。

(国際学部 国際文化学科 2012年3月卒業生)

(2012年3月21日原稿受理)

「感謝を込めて」

下條 晃平

当初海外留学体験の寄稿依頼をされていたのだが、昨夏一か月程のウズベキスタンを中心とした中央アジア三カ国巡りは、卒業論文のフィールドワークであり、更に言うならば調査にかこつけた海外旅行に過ぎないものである。留学などというご大層なモノではない、という旨を担当の土屋様にお伝えしました。それでも構わないので投稿してみてもどうだろうかという暖かいお言葉を頂いたので、今回寄稿させていただきます。

事の発端は、私がウズベキスタンを研究地域に選び、ゼミ中に現地資料の少なさに悪態をついていたところから始まりました。「では実際に行ってみてはどうですか」と松尾准教授に言われ、冗談を言われているのか初めは思いました。ところが、ウズベキスタンに知り合いのツテがあるので良ければ紹介しましょうという現実的な話が飛び出し、一気に後戻りできない状況となり、とんとん拍子で話は進んでいきました。

人生初の国外旅行であり、パスポートの取り方も分からない、そもそも旅費はどうする、ウズベキスタンではどうやって生活するのか、何も分からない所から準備をスタートさせました。あの人に頼り、この人を訪ね、多方面の方々にご迷惑をお掛けしながら、どうか日本から旅立つことが出来ました。

現地では現地大学生の方々に多分な助力を頂き、各大学の資料をお借りし、教授のお話を聞き、現地住民の住宅に実際に宿泊し、冠婚葬祭の行事に参加させて頂きました。

ウズベキスタンに飽き足らず、隣国キルギスに一人旅に出た際も、国境で移動手段が無く、途方に暮れ、言葉も上手く通じない国境警備隊にぼったくりタクシーを呼ばれそうになっていたところを通りすがりのウクライナ人に流暢な英語で助けて頂き、あまつさえ、一夜の宿と食事を提供して頂きました。その後バイクでユーラシア大陸一周を目指す日本人の青年に出会い、キルギス内の道中をご一緒させていただきました。

私は元々勤勉な優秀な学生では無く、部活動とアルバイトに大学生活の大半を費やしてきました。そんな私が、学生生活の最後にこのような貴重な経験をする事が出来たのは、国際学部の懐の広さと、私に関わってくださった皆様の親切によるものです。感謝は言葉に言い表せないで、今後の同窓会と私に関わってくださった全ての皆様のご活躍とご健康をお祈りして、結びの言葉とさせていただきます。

(国際学部 国際文化学科 2012年3月卒業生)

(2012年3月21日原稿受理)

キャリア指南 04 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。第4回目には友松研究室OBの**岩井俊宗**さんをお願いしました。

「ボランティアコーディネーターの役割」

NPO法人宇都宮まちづくり市民工房理事 /

NPO法人とちぎユースサポーターズネットワーク代表理事 **岩井 俊宗**

2005年国際社会学科(友松研究室)を卒業後、NPOやボランティアを支援する「宇都宮市民活動サポートセンター」(以下、「サポセン」。現在「宇都宮市まちづくりセンター」)に勤務しました。そこでは、市民(ボランティア)が主体的に社会づくりに参加していくための「仕掛け」と「調整」、「繋ぎ」を行う「ボランティアコーディネーター」という仕事をしました。ボランティアをしたいという方の相談対応から、公的支援(制度・政策)では対応できない個人のSOSの相談対応、ボランティアをやってみたいという潜在的関心層の掘り起こすための仕掛け、自ら社会課題解決のための事業立案やプログラム策定など業務は多岐に渡りました。2002年のサポセン開所から、2012年1月の「宇都宮市まちづくりセンター」に変わるまでの9年間で、市民活動団体(NPO、ボランティアグループなど)は、600団体、個人ボランティア登録も250名を越えました。現在は「宇都宮市まちづくりセンター」へと変わり、支援対象者もNPOやボランティアに加え、企業や自治会、大学、行政など社会を担う多様な主体が、セクターを越えて繋がりあり、それぞれの強みを活かした地域づくりができるようコーディネート役を担っています。

震災後、宇都宮大学でも「学生ボランティア支援室」が設置され、半年間、震災復興に

関わる学生のボランティア活動の支援（プロジェクトの実現、チームづくり、ボランティアコーディネーター）に関わらせて頂きました。学生のボランティア支援に携わる中で感じた学生が行動に踏み出した「強い想い」の根底に「風化させない」想いがあったことを覚えています。

1年が経ち、被災地以外では日常を取り戻し、被災地では復興の足音も聞こえつつも、被災者の生活を含め、未だそのつめ跡は残されたままです。これから月日が経つにつれて、被災地以外では「風化」が進み、その先に、被災地との意識的溝が生まれてしまうことを危惧しています。ボランティアコーディネーターとして、情報を与えるのではなく、人や資源を繋いでいくことは、社会全体での共有（ソーシャルキャピタル：社会関係資本）を増やし、「風化」を防ぐことができると考えています。その他に、ボランティアコーディネーターとして常に大切にしていることは、支援を必要とする当事者（被災者、社会的弱者）を支援対象とするのではなく、彼らのできることを一つでも増やし、自信と生きがいを持てるようになるために、他者との関わりをどうつくりだせるかということです。私が考える支援は、「与える」のではなく、むしろ“教わる、教えてもらう”ことが重要だと考えています。状況と段階によって、支援の仕方も変わっていきませんが、これからはより、被災者の尊厳と QOL（生活の質）を高める支援が必要になっていくと思います。例えば支援する人は、農家なら畑、漁師なら港、地域住民全体ではお墓やお寺など、人それぞれの想いの強いところを再生すること（象徴的復興）とその際に住民から教えてもらいながら関わっていくことが、住民の意欲と自信を高めていくことに繋がります。そして同時に、将来への安心感や希望を持つためにも産業の基盤を支えていくことが重要だと考えます。これは、我々が消費者という立場で支えることができます。そして何より、日常を取り戻した方にとっては、東日本大震災を過去のものにしないことが大切であると考えます。被災地では以前震災復興の真最中であり、現在進行形です。我々は、被災地を意識的に孤立させないために、復興への想いと行動をそれぞれのできる範囲で継続していくことが「風化」させない方策の一つであると考えます。

（2012年3月11日原稿受理）

（国際学部 国際社会学科 第7期卒業生）

キャリア指南 05 第5回目には石濱研究室 OB の小原一真さんをお願いしました。

「フクシマと向き合うこと」

フォトジャーナリスト 小原 一真

私は昨年7月まで、福島県に足を踏み入れたことがなかった。震災後すぐに親友の実家がある宮城県の南三陸町に向かい、その後、岩手県での取材を開始したが、福島県だけは通過しても立ち寄ることさえしなかった。放射能への恐怖は勿論あったが、被写体を撮る明確な目的が無いまま、被災者、被害者に暴力的にレンズを向けるのはためらわれた。

そんな私が福島での取材を開始して9ヶ月が経つ。福島での原発作業員と出会って以来、取材内容が一変した。

今、私が取り組んでいるテーマは原発で働いている作業員のポートレート撮影とインタビューである。私がこれまでに会ってきた作業員は、福島県出身の人間であり、そのほとんどは、原発事故の被害者である。もともと原発に従事していたが、事故後、20キロ圏内から避難し、借上げ住宅から原発に通っている人、事故の影響で仕事を失い、やむを得ず原発で働いている人、それぞれが福島を離れない理由があり、その為の職場として原発を選択しているのだ。その中には10代の人間だっている。これまでの報道は、ヤクザやピンハネ等、スキャンダラスな話題がほとんどだったが、その影で大多数の作業員の存在が忘れ去られてしまった。私が取材した作業員たちは語る。

「娘の墓があるから、家族は避難させても俺だけは残ろうと思って。」
「誰かがやらなくちゃいけないんだったら、技術のある俺がやらなくちゃ。」
「実際行きたく無かったですよ。でも、仕事だからしょうがないですよ。」
「賠償金をもらって自立出来ないのが嫌だった。だから早く仕事につきたかった。」

震災から一年を経て、既に被災地の外では3.11がメモリアルとして、過去のことのようには扱われがちであるが、原発事故は収束していないし、放射能の影響はこの先、何万年と続いて行くのである。私の第二の故郷と言ってもいい栃木県の北部だって福島県の外ということで忘れられがちであるが、高線量地域が存在し、補償がされない状況で苦しんでいる。実被害を被らない限り、見えない放射能の問題は、いつまで経っても自分とは関係の無い遠い所で起きている話に思えてしまう。しかし、もしフクシマの問題がそういうふうにしてしまう時は、今一度、そこで働く作業員のことを思い出して欲しい。言うまでもなく、彼ら無しには収束などありえないわけであり、私たちのあたりまえの日常は、彼らの仕事の上に成り立っているのだ。それは仮に、ヤクザに斡旋されていようが、ピンハネされていようが関係ない。私たちは、常に彼らに支えられて生きているのである。モザイクの向こうにある顔、変えられる前の本当の声、画面に映る手は何を守る為に働いているのか。フクシマの問題、原発の問題を考えるのを忘れ去る前に、少しでも彼らのことに想いを馳せて欲しい。

(2012年3月21日原稿受理)

(国際学部 国際社会学科 第10期卒業生)

フォーラム 2012年の卯月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。)今回は内山研究室 OG の神山英子さんと柏瀬研究室 OB の水沼徹明さんをお願いしました。なお、水沼さんの原稿は被災地からの投稿ということで、配信予定を延期していましたが、病氣療養が長引いているため次号に掲載します。

「3・11を宇都宮で経験した外国から来た子どもたち」

宇都宮市教育委員会初期日本語指導教室

室長 神山 英子

「先生、パパは今福島。大丈夫？」

中国から来て約1か月の小学生の男の子が日本語でこう言うと、

「大丈夫、大丈夫。」

とやはり中国から来た中学生の女の子が日本語でねぎらう。3・11を宇都宮で経験した次の週の出来事だった。

ここは、宇都宮市にある初期日本語指導教室。平成21年度に開設された教室で、来日3ヶ月以内の外国にルーツを持つ児童生徒が約2ヶ月間、簡単な日本語と学校の決まりを学び、小中学校に編入学する。日本語教室で子どもたちに

「地震、怖かったね。」

と言うと、

「うん、地震怖い。テレビ見た。怖い。教室の下に人がいっぱいいるね。」

と言われ、3階に日本語教室のある市教育センターの1階が避難所になっている事に気がついた。

その日の帰りに1階を通り過ぎる時、つい前の月まで日本語教室に通っていた女の子の家族が避難しに来ていた。聞けば、地震の後ずっと近くの小学校の校庭で、家族3人、頭を抱えながら震えていたとのこと。テレビの映像を見て、津波が押し寄せてくる不安から、家には帰れなかったそうだ。自分が住んでいる場所の位置関係がよくわからない、外国から来たばかりの人たちはどんなに不安だっただろう。

「ガソリンがないので、教室には来られません。」

日本語教室は原則保護者の送迎が必要なので、日本語教室に通えなくなってしまう子どもたちも出てきた。通えている子どもたちも、授業中も落ち着きがないし、表情も暗い。学習に集中できない日々は続いたが、それでも子どもたちは学校に編入学するために必要な言葉やルールを覚えていった。

そのまま春休みを迎え、平成23年度に入ったが、年間20名を超える児童生徒が日本語教室にやってくるが、今年度2月までは震災の影響でその約半数であった。ところが、3月に入る頃から少しずつ増え始めてきている。新たに来た子どもたちの中には、

「地震で国に帰っていた。とても怖かった。」

という子どももいて、やはり、テレビの映像が怖かったのだと言う。音声よりもストレートに情報をキャッチできる映像で今回の3・11を外国から来た子どもたちはどう理解したのか。災害等での言葉のわからないというストレスは子どもにも同様なのだと改めて思い知らされた。外国から来た子どもたちを取り巻く環境として、保護者は母語しかできず、子どもは母語がわからなかったり、日本語も母語も不十分であったりする家庭の状況も見られる。あの子どもたちは、見た事や感じた事を誰に伝えるのか。もう少し時間が経った

ら、またあの時の子どもたちに今はどう受け止めているか聞いてみようと思っている。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第7期修了生)

(2012年3月20日原稿受理)

EU 支部だより

第38号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行することになりました。今回の第4号の内容は、1 イタリアに工房 日本人制作者が震災流木でバイオリン 2 EU 支部だより -あの日から1年-です。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

◎ 宇都宮大学第2回ホームカミング・デー日程決まる！

平成24年10月27日(土曜日)開催、なお当日は農学部90周年も同時開催になります。国際学部卒業生および知求会会員の皆様には、ぜひ数多くのご出席をお願いします。なお、手帳には早々に日程を記入していただければ幸いです。詳細はまた後日ご報告いたします。

●編集者のひとりごと

今号は3.11を振り返る意味を込めて、「災害を考える」編集方針にしました。「海外便り」ではタイの洪水についての平田さんの寄稿、「学生サロン」ではボランティア活動についての菊地さんの寄稿、「キャリア指南」では、NPO 法人で活動されている岩井さんの寄稿とフォトジャーナリストとして活動されている小原さんの寄稿があります。「フォーラム」では日本語教育で活躍されている神山さんの寄稿があります。国際学部卒業生のご意見から、さまざまな立場の原稿を掲載できたらというご指摘に沿う形で企画しました。しかしながら、どれほど意にかなったものか自信はありません。会員の皆様のご意見を頂ければ編集の新たな力になりますので、よろしく願いいたします。

今回、被災地からの水沼徹明さんの原稿を掲載したかったのですが、残念ながら病気のために掲載できず口惜しい気持ちです。今回の知求会ニュースが未完成で配信することに、何卒ご理解いただければ幸いです。なお、水沼さんの寄稿は次号の知求会ニュース第42号に掲載予定です。ご病気の快復を祈るばかりです。

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになりました。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。**
chikyukai@yahoogroups.jp